



## 上川農業試験場天北支場としての新たな出発

支場長 竹田 芳彦

### 1. 天北農業試験場が変わりました

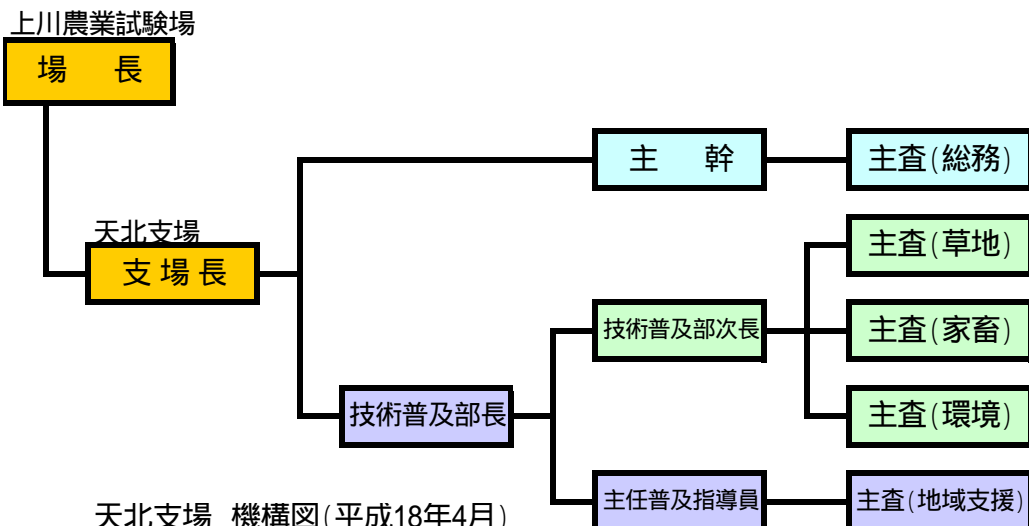
天北農業試験場はこの4月に「上川農業試験場天北支場」となりました。よろしくお祈いします。

実は「天北支場」との名称は初めてではありません。道立の農業（畜産）試験場は北海道開拓史によって1870（明治3）年に設立されたのが始まりですが、その後幾多の変遷を経て1950（昭和25）年に道立農業試験場が誕生し、当時は札幌市琴似を本場とする「天北支場」（天塩町に開設）となっています。「天北農業試験場」となったのは1964（昭和39）年でした。

### 2. 天北支場の機能

平成18年4月、道立農業（畜産）試験場は北海道農業を取り巻く情勢の変化や簡素で効率的、機動的な試験研究体制が求められる中で、「北海道農業・農村ビジョン21」が示す北海道農業・農村の将来像の実現に向けて体制が見直され、これまでの10場体制から8場+1支場体制に変わりました。天北農業試験場は道北圏の地域対応研究等を担う上川農業試験場の天北支場となり、道北地域（宗谷、上川の一部、留萌の一部、網走の一部）における草地酪農に関する実証試験等の地域対応研究を主として実施します。

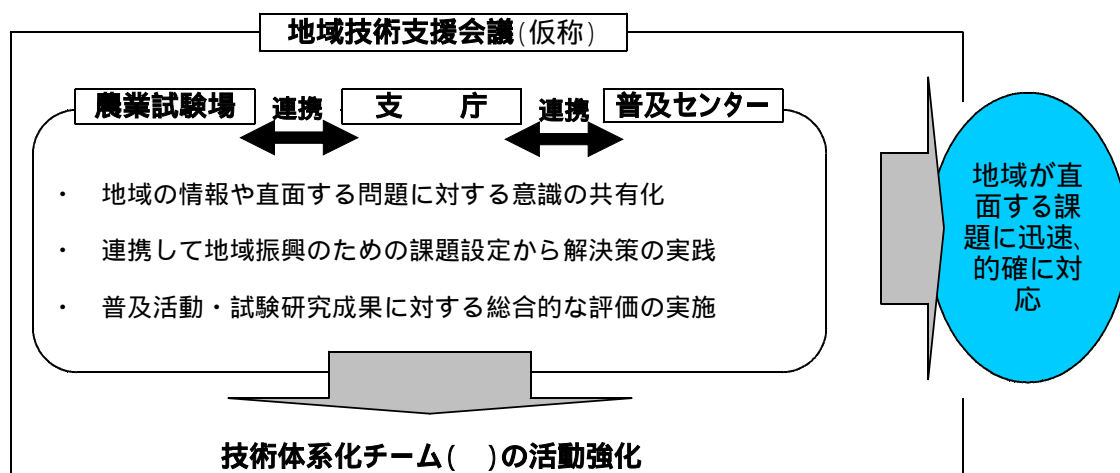
天北農試は研究部と技術普及部の2部体制でしたが、天北支場では技術普及部の1部体制となりました。今回の機構改革では技術普及部の再編も行われ、新たに普及職員の主任普及指導員が配置されるとともに、研究職員と普及職員の主査を配置し、研究成果の普及及び地域対応（地域課題解決）を支庁、農業改良普及センターのほか、支庁によっては家畜保健衛生所等との連携・協働により強化します。



### 3. 地域対応機能を一層強化するために

このためのシステムとして試験場、支庁（行政）、普及センター及び家畜保健衛生所の5機関からなる地域農業技術支援会議が設置されました（図参照）。

地域の農業振興のためには種々の課題があります。その性格から行政が主体となって取り組む必要があるもの、農業改良普及センターが主体となって取り組むもの、試験研究課題として試験場が主体となって解決すべきもの、行政、普及センター、試験場が協働して課題解決に当たるべきもの、などです。地域農業技術支援会議は酪農家はもちろん、市町村、JA、農業団体や消費者等の要望をお聞きしながら、それぞれ役割の中で課題解決に向けた取り組みをしていきます。



技術体系化チーム：平成12年度に初めて道立農業（畜産）試験場に設置された研究職員と専門技術員によるテーマごとに編成するプロジェクトチームで、新たに開発された技術を地域に導入し実用化するための実証的な試験研究や、地域農業に関する技術的課題に対して、既存技術を組み合わせ解決を図る体系化のための試験研究を実施。今後は、研究部門と普及部門双方の参画により、引き続き、技術体系化のための試験を実施。

### 4. 天北支場が担う当面の具体的課題

天北支場が分担する道北地域は一般の農作物栽培には適さない気象・土壌条件のために耕地の95%が草地化され、日本有数の酪農地帯として発展しつつあります。農業生産全般に共通することでもありますが、今後の酪農は農家が求める低コスト・高収益に加えて、消費者が求める安全・安心に答えつつ、持続可能な産業として発展することが必要です。当支場は、最近開発したペレニアルライグラス新品種「ポコロ」や自給飼料生産等の酪農に係る各種キーテクを核とし、集約放牧や飼料生産・利用に係る実証的研究を実施し、道北酪農の振興に貢献してまいります。